

# 大平哲学のふるさと

宮澤 健一

大平さんは、表にあらわさぬ気迫と情熱を心に秘めて生涯を貫かれたが、その源泉の一端を若き日に求めてみることは、許されてよからう。その愛した母校、東京商科大学は、そうした心のふるさとの欠かせぬ一環であったように思われる。私にとって大平さんは大学の大先輩にあたるが、最近たまたま一橋大学の図書館で、若き日の先輩に出会う機会をもつことをえた。図書館三階の書庫の奥に、卒業論文がぎっしり詰まっているコーナーがある。そこで大学ゼミナル時代の大平さんの作品を手にし、その考え方にふれることができたのである。

教授一人に学生が数人から十数人の少数規模で配されて研究指導を受けるゼミナル制度は、明治建学以来連綿と続いた一橋大学の特色であって、ゼミを通じて作成される卒業論文は、学生がその情熱を理性に結集させてつづる最重要課題であった。上田辰之助先生のゼミナルにおける大平さんの昭和十一年卒業の論文テーマは『職分社会と同業組合』であった。その内容は、イギリスの有名な経済史家・思想家・労働教育家トニーの初期の労作の研究が一つの中心になっているが、論文に示された若き日の考え方は、後の日の、偉大な政治家としての信条に引き継がれ、その土台づくりの一部となっているように感ぜられる。

序文（小序）の中で語られているところによれば、上田先生の指導で、トニーの『獲得社会』（The Acquisitive Society, 1921）を読まれたとき、当時「キリスト教に親しむ」ようになっておられた大平さんは、中世の聖トマス・アクィナスの政治経済哲学に思いを馳せ、その現代版としてトニーを位置づけ理解されようとした。

そして曰く、「自由競争も階級闘争も、ともに社会を混乱に陥れて」いる現在、「この対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を超えた協調が要望されるのは、歴史の必然の歩み」であるとしている。そして同時に、現実的な関心として、アメリカの同業組合の性質の検討を試みながら、当時、世界各国で進展しつつあった産業統制の動向に着目して、これを「国家と個人とを媒体する組織」としての組合としてとらえる見方を打ち出されるのである。経済学者は、機能（ファンクション）の側面の研究を重視しているが、組織の研究は閉却しているのではないかと批判し、同業組合研究を位置づけて、これを単に、政治や経済の側面だけではなくて、「個人の社会に対する正しい結びつきを教え、更に進んで全体のために殉ずる精神を培養する」ものとしてとらえる。そして卒業後の研究と思索の方向を、ここに求めると語られるのである。

専門の違いもあって、私の理解は十分とはいいがたいが、若きクリスチャンとして「個人の社会に対する正しい結びつき」に悩み、トニーを読むことによつて、一方で思想的には、古く遡つて聖トマス・アクイナスの世界にあそび、他方、現実的には、時代の問題としての同業組合の動向をとらえようとしたもの、とみることができよう。もとより、同業組合の位置づけ方には異論もあるう。しかし、上記のような幅広い年代に及ぶパノラマ的構想の中に、後年の、日本の指導者としての大平総理の哲学の発端、ならびにその人柄の一端が、躍動しているのを感じる。

これは、誠実と強靱な意思に貫かれた、業績の背景の一面をのぞかせるもので、総理ご在任中、とくに国内よりも海外から高い評価を集めた大平政治の思想的基礎について、その源流にふれたい思ひである。しかもここには、偉大な政治家としてだけでなく、同時に、読書家・思索家としての人間大平さんの真髓の端緒が物語られており、その若き日のふるさとを偲ぶことができたように思えるのである。

（前一橋大学学長）